

## 【高齢者の生きがい】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

### (16) ほっとする生活

昭和40年代までは、50歳代の人を見ると、もうまもなく55歳の定年を迎えようとしている勤め人、定年を向かえのんびりと生活をしている人を見かけた時代です。その人たちは、公務員、大手の会社の勤め人等が多かったようです。中小企業の勤め人は、60歳ぐらいまでは働いていましたし、職人さんは60代前半ぐらいまで働いたと思います。女性は内職程度の仕事であり、今で言うパート勤務程度の人が多かったようです。

昭和35年頃までは、持ち家か借家かであり、アパートのようなものがない時代であり、そこで暮らす高齢者をどう見ていたか、どのような生活をしていたのか、戦争との関係があり内面的なことは理解できないことが多くあると思いますし、個人の問題が多く存在したものであり、時代の流れに翻弄された人たちだろうと感じます。その高齢者をどう見て、どう感じて、その生活の満足度をどう判断するのも今になってもハッキリされていません。その人たちの子どもであり、孫である人が現在の高齢者であり、団塊の世代です。

平均寿命も伸び高齢者と言われて生活する時間も伸びていくことになりすから厄介な時代です。個人のパターンも多くなり、どれが平均的なものかハッキリしませんし、どれが自分によく似たパターンかも理解できないことが多い時代でもあります。そんな時代の中で「ほっとする時間を持つことができるのか、また長くほっとする時間を持つことが可能なのかもわかりません」という答えになってしまうと思います。

今までの時代とどこが大きく異なるのか考えてみてはどうですか、

ほっとする時間を持つことができたのか、

どんな人が、

どんな形で、

どんな思いで、

どんな時間を、

どんな環境で、

持つことができたのか、持つことができなかったのかです。

幸せを感じることに生きてきて良かったと感じること、もう一度人間として生きてみたいと思うこと、充実した人生であったと思うこと、人のために生き人に迷惑を大きくかけなかったことなどをどう感じるかでもあります。無責任に時代を生きることなく何かを感じ、何かを思い、何かを悟り、何かの目的を持ち人生を歩いてきたことの誇りだと思います。